

「私たちの遊び」としてのオニゴっこ

田中浩司

(大学教員)

はじめに

朝夕が過ごしやすくなってきたこの季節、夏のエネルギーをいっぱい蓄えた子どもたちが存分に身体を動かすことのできる遊び環境を準備したいものです。

こうした身体を使って楽しむ遊びの一つに、オニゴっこがあります。オニゴっこといっても、そのルールは多彩で、「高オニ」や「氷オニ」といった誰もが知っているものから、園独自のルールで楽しめるものまで、(追いかける―逃げる)といった対立的な役割を基本としながら、かなり幅広い遊びの総称と言え

ます。

また、オニゴっこの特徴の一つに、自由にルールをつくり変えられることがあります。特に五歳児にもなると、子どもたちがひざをつきあわせ、どうすれば相手チームに勝てるかといった作戦会議や、みんなで楽しむにはどのようなルールにすればよいかを話しあう姿が見られるようになります。時には、「先生はあっちに行つて」と、保育者を除いた子どもだけの話し合いが持たれることもあります。

一方で、遊びの中で子どもの主体性を引き出すことの難しさが訴えられることも少なくありません。保育者が提示したルール通りに

田中浩司(たなか こうじ)
首都大学東京 都市教養学部准教授。専門は発達心理学。保育の中の集団遊びに関心があり、フィールド観察や、実践者との研究会に参加しながら研究しています。

遊ぶことはできても、自分たちで遊びを工夫するという意識が生まれにくく、受動的な関係からなかなか抜け出せないという悩みです。

本小論では、こうした遊びを育てる保育者の援助、特に、「私たちの遊び」として子どもたちが意識するようになる保育のあり方について、皆さんと考えてみたいと思います。

園文化としての遊びを育てる

保育者に、筆者がオニごっこを研究していることを伝えると、うちの園ではこんなオニごっこがはやっていると、わが園のオニごっこ自慢が始まるようになります。こうした、自らの保育を生き生きと、また誇りを持って語ってくれる保育者に会えることは、遊び研究の醍醐味の一つです。

以前、筆者が観察をさせていただいた幼稚園に、^{とら}砦と呼ばれる固定遊具がありました。この砦はなかなか立派というか、少々危ない

んじゃないかと思うくらいの高さがあり、普段子どもたちはこの遊具をアスレチックのよううにして遊んでいました。

子どもたちは、運動場や体育館のように平坦な場所よりも、神社の境内のような起伏や段差のある場所でのオニごっこを好みます。園全体が見渡せるこの砦は、オニごっこにぴったりの場所でした。子どもたちは、そこで遊ぶオニごっこを「砦オニ」と呼び、世界に一つしかない、私たちの幼稚園でしか遊べないオニごっことして大切にしていました。

また、園庭からよく見える場所にある砦の様子は、周りで遊ぶ子どもたちの視界に入ってきてます。入園したての三歳児も、幼稚園に慣れるとすぐに、砦オニをする四、五歳児たちの姿を目にすることになります。すると、保育者が事細かに「砦オニとはね……」などと説明する必要もなく、子どもたちの間で遊びが引き継がれていくのです。

消費文化に生きる子どもたちにとつては、オニごっこもたくさんの遊びの一つとして捉えられ、ちよつと楽しんだらポイントと捨てられてしまう、忘れ去られてしまうことが少なくありません。そうした中、皆オニのような園独自の遊び文化を育てていくことは、子どもたちが遊びを身につけていく上で大切な取り組みと言えるでしょう。

「かかわらない」というかかわり

時に身体をぶつけあうオニごっこでは、子ども同士のいざこも少なからず生じます。自分は軽くタッチしたつもりでも、相手はたかれたと思うこともあります。ただでさえ捕まえられて悔しい中で、とつくみあいのけんかになることもあります。そうした衝突を乗り越えながら遊びを進めていくことの面白さがあるのですが、そうしたいざこごに保育者がかかわり過ぎると、子どもたちの中に、

「困ったときは、先生がなんとかしてくる」という、依存的な構えが生まれてしまうことも少なくありません。

こうした構えを生まないようにするための工夫として、ある保育者は、問題が起こっても放っておく我慢が必要だと言います。この保育者は続けて、「そうしたらだんだん、子どもたちが私を頼らなくなるんです」と。

別の保育者は、もう少し意地悪なかかわりをしていました。ある日、ドロケイでなかなかチームが決まらず、遊びが始められなかったそうです。保育者は、子どもたちの様子を少し離れた所から、知らないふりをして見ていたそうです。筆者が「それで、どうなったんですか？」と聞くと、その保育者はニコッと笑って、「したらね、遊ぶ時間がなくなるんですよ」と答えてくれました。

この保育者はそこで、「皆が早く決めないから遊べないんだよ」などと、お説教のような

ことは言いません。ただ「ご飯の時間になつたから帰ろうか。今日はあんまり遊べなくて残念だったね」とだけ答えるのです。

もちろん、こうしたかかわりばかりでなく、保育者が遊び仲間として、一緒に楽しむことも大切です。時には保育者の側から、新しいルールを提案してみることも必要です。ただし、保育者の一言が、子どもたちだけで問題を解決しながら遊びを進めていくための芽を摘んでしまうことも確かです。

こうした「かかわらない」というかかわりには、我慢も必要ですが、子どもの反応を楽しむ、ちよつと意地悪な遊び心も必要なのかもしれません。

遊びの持つ柔軟性

以前、ある保育園の五歳児クラスで、一年間にわたって「缶蹴りかくれんぼ」と呼ばれるオニごっこを観察させていたたく機会があ

りました。

缶蹴りというのは、幼児にはなかなか難しい遊びで、隠れている子どもを探しながら缶を守るというオニの役割は、遊び全体を捉える広い視野を持つていなくてはできません。案の定、隠れている子どもを探しに行っている間に缶を蹴られてしまい、延々、同じオニが続くこともあります。「もうダメだと思ったら、いつでも仲間に交代をお願いする。その時は、皆で話しあってオニを交代する」というのがこのクラスの取り決めでしたが、頑張りたいけどやっぱ悔しい、と泣いてしまう子どもも少なくありませんでした。

なかなか過酷に見える缶蹴りかくれんぼですが、このクラスの子どもたちはこの遊びを心から楽しんでいるようでした。その理由の一つに、名前にもあるように、この遊びは「かくれんぼ」としても楽しめるという側面がありました。つまり、子どもたちは必ずしもオ

二になって、缶を守ったり、仲間を探して見つけたりといった難しい役割を担う必要はなく、オニに見つからないように隠れているだけでも十分に遊びに参加できるのです。

この缶蹴りかくれんぼでは、あまり足が速くなくても、こっそり隠れていられる子どもであれば、最後まで残ることができます。また、こうした普段あまり目立たない子どもに限って、どこからともなく「出現」し、仲間を助け、その日のヒーローになったりします。

このように、缶蹴りかくれんぼへの参加の仕方は実に多様で、また、そうした多様性を含み込む遊びであったからこそ、一年間という長い期間、子どもたちが飽きずに遊びに打ち込んだと言えるでしょう。

楽しみ方の多様性を捉える

筆者の専門分野である発達心理学の中で、オニごっこは、「ルール遊び」あるいは「ゲー

ム遊び」と呼ばれるジャンルに位置付けられます^注。確かに、こうした遊びは、タッチすると役割を交代する、捕まったら助けを待つ、といったルールがあるからこそ楽しめる遊びです。ただし、遊びを楽しむ子どもたちの視点に立てば、大好きな先生や仲間を追いかけ、仲間と一緒に物陰に隠れるといった、さまざまな楽しみ方で遊びに向きあっていることがわかります。

「私たちのオニごっこ」というのは、こうした一人ひとりの楽しみが重なりあうことで、はじめて楽しめるようになるのではないでしょう

注 田中浩司『集団遊びの発達心理学』北大路書

房 二〇一四年